

# 大学新入生の適応に関する研究 (I)

—学習面での適応—不適応に関わる諸変数の検討—

A Study on First-year Students' Adaptation to University (I)

Focusing on Influential Variables in Learning

広 沢 俊 宗\*

Toshimune HIROSAWA

## 抄 録

新入生がその大学に適応していく過程において、対人関係面と学習面の2つの側面が重要である。ここでは、学習面に焦点を当て、大学新入生の適応過程について考察する。とりわけ、本研究では、大学に入学して半年後(前期の成績を受け取った10月時点で)、自分が学習面で適応していると思っている学生とそうでないと思っている学生とでどのようなちがいがああるかを明らかにすることを目的とするものである。

結果、入学して半年後、学習面で適応している学生はそうでない学生に比べ、成績が良く、学部・学科に適応しており、大学生活における授業へのウェイトのかけ方も高いことが示された。また、大学での学習面のみならず対人関係面においても自信をもっており、この傾向は高校時代から受け継がれていることが明らかにされた。さらに、高校までの学習技術や学習特性が、入学して半年後の学習適応に多大な影響を及ぼしていることが示された。ただし、学習技術や学習特性におけるある特定の因子については、入学後の半年間で向上していることも明らかにされた。よって、学習技術や学習特性は入学時のフィルターとして効力を発揮するとともに、初年次教育における重要な要因であることが裏づけられた。ただし、さまざまな変数が学習適応にどのように関与しているかは、さらに詳細に検討する必要がある、今後の課題としたい。

## 1. 問 題

ユニバーサル化の進展に伴い、大学生の全入時代に突入しつつある現在、日本においても高校から大学への移行の問題は重要なテーマになっている。とりわけ、生徒から学生へ移行する過程での学習面での適応は、大学新入生にとって、あるいは又大学教員にとって重要な課題である。近年、それらを裏付けるが如く、高大連携、学習技術、学習支援、初年次教育などのキーワードをよく耳にするようになってきた。

---

\* 関西国際大学経営学部

広沢 (2003) は、高校生・大学生を対象に、学習技術 45 項目と学習特性 35 項目に関する調査を実施し、両群の因子構造を比較検討している。その結果、学習技術に関しては高校生で 8 因子、大学生で 11 因子、学習特性に関しては高校生で 7 因子、大学生で 8 因子抽出しており、学習技術、学習特性ともに因子数および因子の重要性の順序は両群で若干異なるもののかなり類似した構造を示していることを明らかにしている。

新入生がその大学に適応していく過程を考えた場合、本来、2つの側面が重要であると推察される。第1は、対人関係面(友人関係、教員との関係など)であり、第2は、学習面である。ここでは、学習技術や学習特性などの諸変数も加味しながら学習面に焦点を当て、大学新入生の適応過程について考察していくことにする。したがって、本研究は、大学に入学して半年後(前期の成績を受け取った10月時点で)、自分が学習面で適応していると思っている学生とそうでないと思っている学生とでどのようなちがいがあるのかを明らかにすることを目的とするものである。まず、高校と大学における学習面での適応の自己認知について掌握したうえで、その妥当性を前期の成績から検証する。次に、適応者と不適応者の属性(性別、居住形態、出身高校の4年制大学への進学状況、入学した大学の志望順位、両親の大学・短大への進学状況)によるちがいについて検討する。さらに、両者における入学後の諸変数(10月時点での学習技術・学習特性、初めて成績を受け取った際の感想、大学生活におけるウエイトのかけ方、学部・学科への適応、さまざまなことへの自信)および入学までの諸変数(4月時点での学習技術・学習特性、高校生活について)について、どのような差異があるのかを明らかにする。上述のような方法で、大学に入学して半年後の学習面での適応—不適応を生み出す諸要因について探索的に検討していく。

## 2. 方法

### 2. 1 質問紙

#### 2. 1. 1 学習技術に関する質問紙

学習技術に関する質問紙は、広沢 (2003) が高校生用と大学生用に作成した各 45 項目を主成分分析した結果をもとに 20 項目が抽出され、用いられた。反応カテゴリーの形式は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で、学習技術が高いほど(学習成果を positive にもたらす方向で) 高得点になるように、1 点から 4 点に得点化されている。

なお、本分析においては、広沢 (2003) の主成分分析の結果を参考にし、6 つの合成変数が用いられた。「本の内容や話の要点を箇条書きにできる」、「自分の意見と事実を分けて書ける」、「内容の善し悪しや正誤を考えながら読むことがある」、「本や論文の内容を決められた字数で要約できる」より「文脈把握」、「授業中に大切なことはノートに書いておく」、「ノートを貸してくれると頼まれることがよくある」、「黒板に書かれたことはノートに書く」、「ノートを整理する時は自分なりの工夫をしている」より「ノートテイキング」、「あるテーマについてインターネットで情報収集できる」、「大学の図書館

にない本の探し方を知っている」, 「誕生日にどんな出来事があったかを調べられる」, 「書けない漢字は調べずにひらがなで書いてしまう」(反転項目), 「読み方のわからない漢字を漢和辞典で調べられる」より「リサーチ」, 「ノートに必ず日付を入れる」, 「授業で配布された資料(プリント)を整理している」, 「本の並べ方を自分なりに決めている」より「資料整理」, 「教科書やノートの言葉通りに正確に覚える」, 「理屈を考える前に暗記する」より「暗記」, 「テストの時は時間配分を考えて解答する」, 「テストの答えは必ず見直してから提出する」より「テストテクニック」の6つであり, これらは各項目の合計得点を項目数で割った平均得点が算出され, 用いられた。

## 2. 1. 2 学習特性に関する質問紙

学習特性に関する質問紙は, 広沢(2003)が高校生用と大学生用に作成した各35項目を主成分分析した結果をもとに21項目が抽出され, 用いられた。反応カテゴリーの形式は, 「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で, 学習特性が高いほど(学習成果を positive にもたらす方向で)高得点になるように, 1点から4点に得点化されている。

なお, 本分析においては, 学習技術と同様, 広沢(2003)の主成分分析の結果を参考にし, 6つの合成変数が用いられた。「図書館に本を借りに行くことがある」, 「学習することは嫌いではない」, 「読書中に意味不明の言葉が出てきたら辞書で調べる」, 「教科書, 参考書, マンガ, 雑誌以外の本を買いに行ったことがある」, 「TVのニュースや教養番組を見ることもある」, 「読書をするのは好きである」, 「大学で学んでみたい学問分野がはっきりしている」より「知的関心」, 「手帳にスケジュールを書いている」, 「日常生活で自分の立てたスケジュールをよく守る」, 「自分の立てた計画通りに勉強できる」より「計画性」, 「まわりの友人に比べて学習時間が少ない」(反転項目), 「TVやマンガを見て勉強を中断することがある」(反転項目), 「自分で勉強を始めることが難しい」(反転項目)より, 「集中性」, 「授業中に出された宿題はきちんとやっていく」, 「授業で出された課題はきちんと提出している」, 「授業欠席時にはすぐ友人にノートを借りて補っている」, 「指定された教科書や参考書はきちんとそろえている」, 「1ヶ月間無遅刻・無欠席ですべての授業に出られる」より「遂行性」, 「大学の規則はきちんと守っている」より「規範遵守」, 「授業中, 私語や態度について注意されたことがある」(反転項目), 「授業中, 携帯電話でメールのやりとりをしたことがある」(反転項目)より「受講マナー」の6つであり, これらは各項目の合計得点を項目数で割った平均得点が算出され, 用いられた。

## 2. 1. 3 その他の質問紙

高校と大学における学習面での適応(4択), 前期の成績で80点以上取った科目の割合(4択), 出身高校の4年制大学への進学状況(5択), 入学した大学の志望順位(3択), 両親の大学・短大への進学状況(4択), 大学で初めて成績を受け取った際の感想(4件法), 大学生活におけるウエイトのかけ方(数値分配法), さまざまなことに対する自信(5件法), 学部・学科への適応(4件法), 高校時代について(5件法)などの項目を含む質問紙が用いられた。

## 2. 2 調査対象

4年制の3大学の新生 537名(男子 358, 女子 177, 無回答 2)を対象に実施された。各大学の内訳は、P大学 204名(男子 129, 女子 74, 無回答 1), Q大学 194名(男子 129, 女子 65), R大学 139名(男子 100, 女子 38, 無回答 1)であった。

## 2. 3 調査の実施

2003年4月, 6月, 10月の3時点において, 各大学の授業時間を利用し, 集団自記式にて実施された。なお, 大学新入生の半年間の適応過程が分析できるように, 各調査時に学籍番号を記入させた。

## 3. 結果および考察

### 3. 1 高校と大学における学習面での適応の自己認知とその妥当性

表1は, 入学して半年後の10月に, 高校と大学における学習面での適応について4つの選択肢から選ばせた結果である。「高校でも大学でもうまくいっている」(30.98%)と回答した学生は全体の3割程度であり, 「高校ではうまくいっていなかったが, 大学ではうまくいっている」(27.65%)と答えた学生も3割弱存在しており, 大学での学習面で適応していると思っている学生は, 両者をあわ

表1 高校と大学における学習面での適応

学習適応	項目	人数	比率(%)
学習適応者 (58.63%)	高校でも大学でもうまくいっている	149	30.98
	高校ではうまくいっていなかったが、 大学ではうまくいっている	133	27.65
学習不適応者 (39.71%)	高校ではうまくいっていたが、大学で はうまくいっていない	128	26.61
	高校でも大学でもうまくいっていない	63	13.10
無回答		8	1.66
計		481	100.00

せ6割近くいることがわかる。一方, 「高校ではうまくいっていたが, 大学ではうまくいっていない」(26.61%)と答えたのが全体の4分の1強であり, 「高校でも大学でもうまくいっていない」(13.10%)と答えたのは1割強であることから, 大学での学習面で不適応を起こしていると思われる学生は, 両者をあわせ4割弱存在することがわかる。

これらはいくまで, 大学での学習面について自分でうまくいっていると思っているかどうかの自己認知の結果であるので, その妥当性を吟味しておく必要がある。ここでは, 前期の成績で80点以上

取った科目の割合を学習面での適応者と不適応者で比較検討することによって、その妥当性を検証する。表2は、80点以上取った科目の割合を両者で比較したものであり、図1は、それをグラフ化した

表1 前期の成績で80点以上取った科目の割合

		4分の1未満	半分未満	半分以上	4分の3以上	計
学習適応者	人数	52	72	68	75	267
	比率(%)	19.48	26.97	25.47	28.09	100.00
学習不適応者	人数	87	42	33	14	176
	比率(%)	49.43	23.86	18.75	7.95	100.00

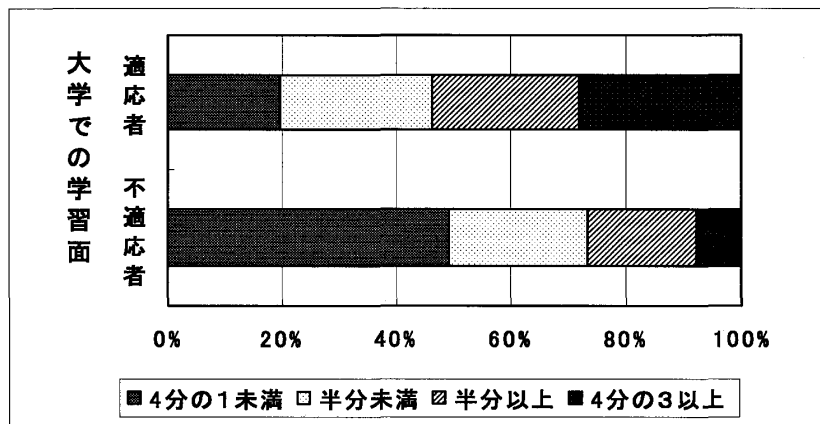


図1 前期の成績で80点以上取った科目の割合の比率

ものである。大学での学習がうまくいっていると認知している者で80点以上取った科目の割合が4分の3以上と回答した者は28.09%、半分以上と回答した者は25.47%とそうでない者（4分の3以上：7.95%、半分以上：18.75%）に比べかなり多いことがわかる。一方、大学での学習がうまくいっていないと認知している者で80点以上取った科目の割合が4分の1未満と回答した者は49.43%あり、不適応者の約半数を占めるのに対し、うまくいっていると答えた者では2割程度（19.48%）にとどまっていることがわかる。

以上より、大学での学習がうまくいっていると認知している者ほど前期の成績が比較的良いのに対し、そうでないと認知している者はかなり成績の悪いことが裏付けられている。大学での学習がうまくいっているということは、必ずしも成績だけで議論できるものではないが、学習面での適応についての自己認知はかなり妥当性のあるものと推察できる。なぜなら、大学での学習に興味を持ち、授業が理解でき、意欲的に学んでいたとすれば、成績とも相関すると考えられるからである。このことをさらに正確に捉えるためには、実際の成績と照合する必要があるが、今回の結果は学習面での適応の自己認知を十分に妥当化するものと考えられるので、ここからは、適応—不適応のちがいを生み出すと考えられる諸変数について探索的に検討していくものとする。

### 3. 2 学習面での適応—不適応者による属性のちがい

表3は、学習面での適応者と不適応者の男女別内訳を示したものである。男子の場合は、適応者と不適応者がほぼ半数ずつであるのに対して、女子の場合は、7割以上が学習面でうまくいっていると回答していることがわかる。このような性差が何により生じているかは現段階ではわからないが、学習技術や学習特性の側面から今後、検討していきたい。

表3 学習適応者と不適応者の男女別内訳

		男子	女子	計
学習適応者	人数	149	100	249
	比率(%)	56.44	72.46	61.94
学習不適応者	人数	115	38	153
	比率(%)	43.56	27.54	38.06
計	人数	264	138	402
	比率(%)	100.00	100.00	100.00

表4 学習適応者と不適応者の居住形態別内訳

		自宅生	下宿生	計
学習適応群	人数	172	78	250
	比率(%)	61.87	62.40	62.03
学習不適応群	人数	106	47	153
	比率(%)	38.13	37.60	37.97
計	人数	278	125	403
	比率(%)	100.00	100.00	100.00

表4は、学習面での適応者と不適応者の居住形態別内訳を示したものである。自宅生も下宿生も適応者が全体の6割強いるのに対し、不適応者は4割弱であることがわかる。このことから、居住形態は学習面での適応に何ら関係がないといえる。

表5は、学習面での適応者と不適応者で、出身高校の4年制大学への進学状況に差があるかどうか

表5 出身高校の4年制大学への進学状況

学習適応		4分の3 以上進学	半分くらい 進学	4分の1 程度進学	ほとんど いない	わからない	計
適応者	人数	66	79	42	19	33	239
	比率(%)	27.62	33.05	17.57	7.95	13.81	100.00
不適応者	人数	42	52	20	14	22	150
	比率(%)	28.00	34.67	13.33	9.33	14.67	100.00
計	人数	108	131	62	33	55	389
	比率(%)	27.76	33.68	15.94	8.48	14.14	100.00

を示したものである。両者ともに4分の3以上が進学する高校が3割弱、半分くらい進学する高校が3分の1程度、4分の1程度進学する高校が15%前後、ほとんど進学しない高校が1割未満となっており、適応者と不適応者で出身高校の4年制大学への進学状況に差はないといえる。

表6 入学した大学の志望順位

学習適応		第1志望	第2志望	第3志望 以下	計
適応者	人数	141	57	50	248
	比率(%)	56.85	22.98	20.16	100.00
不適応者	人数	91	29	33	153
	比率(%)	59.48	18.95	21.57	100.00
	人数	232	86	83	401
	比率(%)	57.86	21.45	20.70	100.00

表6は、学習面での適応者と不適応者で、入学した大学の志望順位を比較したものである。両者ともに第1志望で入学した者が6割弱、第2志望で入学した者が2割前後、第3志望以下で入学した者が2割程度ということで、適応者と不適応者で入学した大学の志望順位に差はないといえる。

表7は、学習面での適応者と不適応者で、両親の大学・短大への進学状況に差があるかどうかを示したものである。適応者のほうが不適応者に比べ、父親だけ卒業している者(20.97% > 14.67%)、および両方卒業している者(30.65% > 25.33%)の比率が若干高いのに対し、不適応者の方が両方とも卒業していない者の比率(47.33% > 36.69%)が1割程度高いことがわかる。両親ともに大学・短

表7 両親の大学・短大への進学状況

学習適応		父親だけ 卒業	母親だけ 卒業	両方卒業 している	両方卒業 していない	計
適応者	人数	52	29	76	91	248
	比率(%)	20.97	11.69	30.65	36.69	100.00
不適応者	人数	22	19	38	71	150
	比率(%)	14.67	12.67	25.33	47.33	100.00
計	人数	74	48	114	162	398
	比率(%)	18.59	12.06	28.64	40.70	100.00

大に進学しておらず、その子どもが初めて大学に進学する場合そのケースを第1世代と呼び、大学に適応していく上で種々のハードルが存在すると主張する立場がある。ただし、第一世代の何がどのように影響し適応しにくいのかはまだ明らかではない。しかしながら、適応者に比べ不適応者の方に第1世代が1割程度多く存在することは、第1世代問題に示唆的な結果であると思われ、今後の課題としたい。

### 3. 3 学習面での適応—不適応者による入学後の諸変数の検討

まず、10月時点で調査した他の変数との関係性をみていくことにする。表8は、10月時点での学習技術の因子別平均値および標準偏差を示したものである。適応者と不適応者において平均値の差の検定を行った結果、「暗記」以外のすべてで有意差が見出された。すなわち、学習面で適応している学生の方が「文脈把握」「ノートテイキング」「リサーチ」「資料整理」「テストテクニック」の学習技術の高いことが明らかにされた。このような学習技術の差がどの時点で生じたかは重大な関心事である

表8 10月時点での学習技術の因子別平均値および標準偏差

学習技術	学習適応	平均値	標準偏差	
文脈把握	適応者	2.75	.57	***
	不適応者	2.51	.63	
ノート テイキング	適応者	2.93	.64	***
	不適応者	2.63	.69	
リサーチ	適応者	2.97	.52	***
	不適応者	2.75	.61	
資料整理	適応者	2.88	.70	***
	不適応者	2.60	.79	
暗記	適応者	2.55	.75	
	不適応者	2.49	.79	
テスト テクニック	適応者	2.88	.75	**
	不適応者	2.66	.79	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

ので、4月時点での結果とあわせてのちに触れることにする。

表9は、10月時点での学習特性の因子別平均値および標準偏差を示したものである。適応者と不適

表9 10月時点での学習特性の因子別平均値および標準偏差

学習特性	学習適応	平均値	標準偏差	
知的関心	適応者	2.90	.53	***
	不適応者	2.59	.57	
計画性	適応者	2.57	.69	***
	不適応者	2.18	.70	
集中性	適応者	2.27	.61	***
	不適応者	1.96	.66	
遂行性	適応者	3.10	.59	***
	不適応者	2.70	.64	
規範遵守	適応者	3.17	.69	**
	不適応者	2.98	.85	
受講マナー	適応者	2.44	.83	**
	不適応者	2.24	.83	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

応者において平均値の差の検定を行った結果、すべての特性において有意差が見出された。すなわち、学習面で適応している学生の方が「知的関心」が強く、「計画性」「集中性」「遂行性」に富み、「規範遵守」し、「受講マナー」も良いということが明らかにされた。このような学習特性の差がどの時点で生じたかも重大な関心事であるので、4月時点での結果とあわせてのちに触れることにする。

表10は、大学で初めて成績を受け取った際の感想の平均値と標準偏差を示したものである。学習面での適応者と不適応者で平均値の差の検定を行った結果、適応者の方が「定期試験が始まる前に想像していたより良かった。」「他の人と比べ自分の成績は良いほうだと思った。」「自分の思っていたより良い成績の科目が多かった。」「高校時代と比べ成績は良くなったと思う。」「大学での勉強のコツが



表 10 大学で初めて成績を受け取った際の感想の平均値と標準偏差

	学習適応	平均値	標準偏差	
定期試験が始まる前に想像していたより良かった。	適応者	2.82	.91	***
	不適応者	2.32	1.02	
自分の学習時間を考えればこんなものだと思った。	適応者	2.77	.77	
	不適応者	2.69	1.04	
良い成績を取るのには難しいと思った。	適応者	2.77	.92	
	不適応者	2.86	1.01	
他の人と比べ自分の成績は良いほうだと思った。	適応者	2.35	.87	***
	不適応者	1.90	.89	
自分の思っていたより良い成績の科目が多かった。	適応者	2.72	.96	***
	不適応者	2.17	1.01	
自分の思っていたより悪い成績の科目が多かった。	適応者	2.26	.93	(*)
	不適応者	2.44	1.05	
単位が取れなかった科目があった。	適応者	1.77	1.18	***
	不適応者	2.21	1.34	
高校時代と比べ成績は良くなったと思う。	適応者	2.50	.91	***
	不適応者	1.94	1.00	
成績評価について納得できない科目があった。	適応者	2.46	1.10	
	不適応者	2.49	1.14	
大学での勉強のコツがわかったような気がした。	適応者	2.55	.82	***
	不適応者	2.07	.91	
もっと勉強しなければいけないと思った。	適応者	3.16	.86	
	不適応者	3.05	1.00	
大学で勉強を続けていくのは難しいと思った。	適応者	2.26	.89	***
	不適応者	2.72	1.00	

注 . (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

わかったような気がした。」と感じているのに対し、不適応者の方は、「単位が取れなかった科目があった。」「大学で勉強を続けていくのは難しいと思った。」と強く感じており、「自分の思っていたより悪い成績の科目が多かった。」と思う傾向がみられた。したがって、学習面での適応者の方は大学での初めての成績が良く満足しており、大学での勉強のコツもわかったような気がしているのに対して、不適応者の方は成績が悪く単位を落としている科目もあり、大学での学業継続が難しいと感じていることがわかる。なお、これらは学習面での自己認知を妥当化する結果とも捉えることができる。

表 11 は、大学生活において、授業、クラブ、アルバイト、学外学習、その他にどの程度ウエイトを置いているかを数値分配法(上記 5 項目に対してウエイトのかけ方の合計が 100 になるように数値分配すること)によって回答させた平均値と標準偏差を適応者と不適応者に分けて示したものである。

表 11 大学生活におけるウエイトのかけ方

学習適応		授業	クラブ	アルバイト	学外学習	その他
適応者	平均値	41.59	11.28	19.73	15.10	12.30
	標準偏差	19.78	16.60	17.28	13.95	18.70
不適応者	平均値	34.06	13.00	23.20	12.53	17.22
	標準偏差	22.20	19.14	20.23	13.26	22.87
計	平均値	38.59	11.96	21.12	14.07	14.26
	標準偏差	21.08	17.65	18.57	13.72	20.58

両者を比較すると、不適応者に比べ適応者の方がやや「授業」にウエイトを置いていることがわかるものの、他の4領域については両者で顕著な差はみられない。

次に、6月時点で調査した2種類の変数を取り上げみていくことにする。表12は、さまざまなことに対する自信度の平均値と標準偏差を、学習面での適応者と不適応者に分けて示したものである。16項目中、有意差がみられなかったのは「数学的思考」のみであり、残り15項目すべてにおいて適応者のほうが自信のあることが示されている。内容的にみると、「大学での講義の理解度」「教養の深さ」「コンピュータの活用力」「知性」「文章作成能力」「高校までの勉強」といった学習面での自信はもちろんであるが、「流行しているモノや話題の多さ」「いつも冷静でいること」「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」「人付き合いや対人関係」「自己理解」などの対人関係面での自信、およびその他の「体力」「『やればできる』という自信」「努力をすること」といった自信も学習面での適応者の方が高いということである。これより、学習面での自信と対人関係面での自信は全く独立したもの

表12 さまざまなことに対する自信度の平均値と標準偏差

	学習適応	平均値	標準偏差	
大学の講義の理解度	適応者	3.30	.88	***
	不適応者	2.73	.96	
教養の深さ	適応者	3.16	.81	**
	不適応者	2.82	.97	
流行しているモノや話題の多さ	適応者	3.21	.97	**
	不適応者	2.95	.91	
コンピュータの活用力	適応者	3.18	1.03	**
	不適応者	2.84	1.08	
いつも冷静でいること	適応者	3.38	.97	**
	不適応者	3.05	1.09	
リーダーシップ	適応者	2.86	1.00	**
	不適応者	2.51	1.13	
数学的思考	適応者	2.59	1.18	
	不適応者	2.40	1.15	
体力	適応者	3.38	1.18	*
	不適応者	3.12	1.22	
プレゼンテーション能力	適応者	2.71	.98	*
	不適応者	2.45	1.04	
知性	適応者	3.06	.90	**
	不適応者	2.75	.96	
人付き合いや対人関係	適応者	3.74	.93	***
	不適応者	3.22	1.14	
自己理解	適応者	3.60	.88	**
	不適応者	3.32	1.06	
文章作成能力	適応者	2.98	1.02	**
	不適応者	2.64	1.03	
高校までの勉強	適応者	3.04	1.10	*
	不適応者	2.75	1.08	
自分は「やればできる」という自信	適応者	3.47	1.16	*
	不適応者	3.14	1.26	
努力をすること	適応者	3.55	1.06	**
	不適応者	3.20	1.15	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

ではなく、何らかの関連性があるように思われる。そして、大学への適応に関しても従来から両者は分けて議論されているものの、何らかの関連性が存在することが示唆されるが、この点についても今後の課題としたい。

表 13 は、学部・学科への適応度の平均値と標準偏差を示したものである。学習面での適応者と不

表 13 学部・学科への適応度の平均値と標準偏差

	学習適応	平均値	標準偏差	
自分の性格にあっている	適応者	2.39	.57	***
	不適応者	2.06	.66	
自分の興味・関心にあっている	適応者	2.59	.56	***
	不適応者	2.26	.71	
自分の能力を生かすことができる	適応者	2.26	.55	***
	不適応者	2.01	.63	
高校時代の得意科目を生かすことができる	適応者	1.87	.71	
	不適応者	1.75	.71	
希望する職業に就ける	適応者	2.23	.65	
	不適応者	2.12	.64	
自分の求めている生き方ができる	適応者	2.23	.62	**
	不適応者	2.04	.63	
現在の専門を学んでいることを誇りに思う	適応者	2.24	.66	**
	不適応者	2.03	.67	
新しい自分の専門を学び直せるとしてもやはり今の学部・学科を選ぶ	適応者	2.18	.71	***
	不適応者	1.92	.72	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

適応者で平均値の差の検定を行った結果、適応者の方が「自分の性格にあっている」「自分の興味・関心にあっている」「自分の能力を生かすことができる」と思っており、また、「自分の求めている生き方ができる」「現在の専門を学んでいることを誇りに思う」としており、「新しい自分の専門を学び直せるとしてもやはり今の学部・学科を選ぶ」と回答していることから、学部・学科への適応と学習面での適応は相関関係にあるといえる。学部・学科への適応に関しては6月時点でのデータであり、学習面での適応に関しては10月時点でのデータであるが、それだけで両者の因果関係を結論づけるのは早計である。したがって、自分の学びたい内容が学習できる学部・学科に進んだから学習面で適応できたのか、あるいは、大学での学習がうまくいっているから学部・学科に適応していったのかは、さらに詳細に分析する必要があると思われる。

### 3. 4 学習面での適応—不適応者による入学までの諸変数の検討

さらに、4月時点で調査した3種類の変数についてみていくことにする。表 14 は、4月時点での学習技術の因子別平均値および標準偏差を示したものである。このデータは高校までの学習技術をあらわしていると考えられるが、適応者と不適応者において平均値の差の検定を行った結果、「暗記」以外のすべてにおいて有意差が見出された。すなわち、学習面で適応している学生の方が「文脈把握」

「ノートテイキング」「リサーチ」「資料整理」「テストテクニック」の学習技術の高いことが明らかにされ、この結果は10月時点の結果と一致している。

表15は、4月時点での学習特性の因子別平均値および標準偏差を示したものである。このデータ

表14 4月時点での学習技術の因子別平均値および標準偏差

学習技術	学習適応	平均値	標準偏差	
文脈把握	適応者	2.56	.67	***
	不適応者	2.25	.71	
ノート テイキング	適応者	2.94	.62	***
	不適応者	2.69	.69	
リサーチ	適応者	2.59	.62	***
	不適応者	2.32	.58	
資料整理	適応者	2.82	.73	***
	不適応者	2.47	.74	
暗記	適応者	2.53	.77	
	不適応者	2.43	.80	
テスト テクニック	適応者	2.86	.82	***
	不適応者	2.45	.86	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表15 4月時点での学習特性の因子別平均値および標準偏差

学習特性	学習適応	平均値	標準偏差	
知的関心	適応者	2.81	.57	***
	不適応者	2.48	.62	
計画性	適応者	2.43	.73	***
	不適応者	2.07	.69	
集中性	適応者	2.20	.62	**
	不適応者	1.98	.68	
遂行性	適応者	3.12	.56	***
	不適応者	2.77	.62	
規範遵守	適応者	3.23	.73	*
	不適応者	3.06	.81	
受講マナー	適応者	2.60	.95	*
	不適応者	2.37	.98	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

も高校までの学習特性をあらわしていると考えられるが、適応者と不適応者において平均値の差の検定を行った結果、すべての特性において有意差が見出された。すなわち、学習面で適応している学生の方が「知的関心」が強く、「計画性」「集中性」「遂行性」に富み、「規範遵守」し、「受講マナー」も良いということが明らかにされ、この結果も10月時点の結果と一致している。

以上より、10月および4月時点での学習技術・学習特性の結果をあわせて考察すると、大学新入生が入学して半年後に学習面で適応できているか否かは、むしろ高校までの学習技術・学習特性と密接に関係していると結論づけられる。

表16は、高校時代についての回答の平均値および標準偏差を示したものである。これより、学習面で適応している学生の方が、「高校時代、毎日の授業時間が充実していた。」と感じており、「高校

表 16 高校時代についての回答の平均値および標準偏差

	学習適応	平均値	標準偏差	
高校での学習は順調に進んでいた。	適応者	3.27	1.17	**
	不適応者	2.94	1.27	
高校時代、毎日の授業時間が充実していた。	適応者	3.10	1.23	***
	不適応者	2.60	1.17	
高校での友人関係はうまくいっていた。	適応者	4.40	.93	**
	不適応者	4.04	1.19	
高校時代、先生とのコミュニケーションがとりやすかった。	適応者	3.86	1.15	*
	不適応者	3.59	1.22	
高校での先生の指導に満足していた。	適応者	3.20	1.18	*
	不適応者	2.91	1.24	
高校の施設・設備に満足していた。	適応者	3.15	1.30	**
	不適応者	2.77	1.33	
高校時代、自分のやりたいことがはっきりしていた。	適応者	3.30	1.38	**
	不適応者	2.82	1.42	
高校時代、健康であった。	適応者	4.35	1.05	
	不適応者	4.19	1.09	
高校時代、毎日よく眠れた。	適応者	3.77	1.30	
	不適応者	3.55	1.27	

注 . (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

での学習も順調に進んでいた。」ようであり、「高校での先生の指導に満足していた。」ことがわかる。また、対人関係面においても「高校での友人関係はうまくいっていた。」「高校時代、先生とのコミュニケーションがとりやすかった。」と答えている。そして、「高校時代、自分のやりたいことがはっきりしていた。」ことがわかる。その他として、「高校の施設・設備に満足していた。」ようである。以上より、高校時代の学習面での適応状況は、大学での学習適応にもかなり関与していると考えられる。また、高校時代の対人関係面での適応状況も何らかの形で大学での学習適応に関わっていると推測されるが、この点に関しても今後の課題としたい。

### 3. 5 学習技術・学習特性の半年間における変化

表 17, 18 は、学習面での適応者、不適応者の学習技術の半年間における変化を因子別に示したものである。4月と10月とで有意な差がみられたものは、適応者、不適応者に共通するものとして「文脈把握」、「リサーチ」、「資料整理」の3因子があげられ、これらの学習技術は両者ともにそれなりに半年間で向上していることがわかる。さらに、不適応者のみ「テストテクニック」にも有意差がみられ、学習面でうまくいっていないと思っている学生でもそれなりに「テストテクニック」が向上していることが伺える。なお、この技術については、適応者は4月時点から高いことがわかる。

表 19, 20 は、学習面での適応者、不適応者の学習特性の半年間における変化を因子別に示したものである。4月と10月とで有意な差がみられたものは、適応者、不適応者に共通するものとして「知的関心」、「計画性」の2因子があげられ、これらの学習特性は両者ともにそれなりに半年間で向上し

表 17 学習面での適応者の学習技術の因子別変化

学習技術	調査時点	平均値	標準偏差	
文脈把握	10月	2.78	0.56	***
	4月	2.56	0.67	
ノート テイキング	10月	2.95	0.62	
	4月	2.94	0.62	
リサーチ	10月	3.00	0.52	***
	4月	2.60	0.62	
資料整理	10月	2.91	0.67	*
	4月	2.82	0.74	
暗記	10月	2.56	0.74	
	4月	2.52	0.77	
テスト テクニック	10月	2.89	0.74	
	4月	2.86	0.82	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表 18 学習面での不適応者の学習技術の因子別変化

学習技術	調査時点	平均値	標準偏差	
文脈把握	10月	2.52	0.61	***
	4月	2.26	0.71	
ノート テイキング	10月	2.67	0.67	
	4月	2.70	0.68	
リサーチ	10月	2.77	0.59	***
	4月	2.32	0.58	
資料整理	10月	2.57	0.80	(*)
	4月	2.47	0.74	
暗記	10月	2.50	0.77	
	4月	2.43	0.80	
テスト テクニック	10月	2.66	0.81	**
	4月	2.44	0.86	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表 19 学習面での適応者の学習特性の因子別変化

学習特性	調査時点	平均値	標準偏差	
知的関心	10月	2.92	0.54	***
	4月	2.81	0.57	
計画性	10月	2.58	0.69	***
	4月	2.44	0.73	
集中性	10月	2.26	0.61	
	4月	2.20	0.62	
遂行性	10月	3.12	0.59	
	4月	3.13	0.56	
規範遵守	10月	3.18	0.70	
	4月	3.23	0.73	
受講マナー	10月	2.46	0.82	**
	4月	2.61	0.95	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表 20 学習面での不適応者の学習特性の因子別変化

学習特性	調査時点	平均値	標準偏差	
知的関心	10月	2.63	0.56	**
	4月	2.48	0.63	
計画性	10月	2.21	0.66	*
	4月	2.07	0.69	
集中性	10月	2.00	0.66	
	4月	1.98	0.68	
遂行性	10月	2.73	0.65	
	4月	2.76	0.62	
規範遵守	10月	2.96	0.83	
	4月	3.07	0.81	
受講マナー	10月	2.25	0.82	
	4月	2.37	0.98	

注. (\*)  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

ていることがわかる。さらに、適応者のみ「受講マナー」にも有意差がみられるものの、4月よりも10月の方が低くなっていることから「受講マナー」が悪くなっていることがわかる。このことは、半年経過して大学での授業にもある程度慣れ、受講態度に緩みが出てきているように思われる。

#### 4. 総合考察

まず、学習面での適応の自己認知については、高校と大学での学習についてうまくいったかどうか(うまくいっているかどうか)を組み合わせ、4つの選択肢から1つを選ばせた。そして、本分析では、高校時代の学習適応がどうであれ、大学に入学して半年後、学習面でうまくいっているか否かによって適応者と不適応者の2群に分け、その差異を検討してきた。学習面での適応—不適応はあくまで自己認知であるため、最初に前期の成績(80点以上取った科目の割合)を用いてその妥当性が検証された。全般的に適応者は成績が上位の方向に偏って分布しているのに対して、不適応者は成績が下位の方向に偏っていることが見出され、学習面での適応—不適応の妥当性が一部裏付けられたといえる。

次に、適応者と不適応者の属性(性別、居住形態、出身高校の4年制大学への進学状況、入学した大学の志望順位、両親の大学・短大への進学状況)によるちがいが検討された。その結果、性別と両親の大学・短大への進学状況の2要因において両者の間で差が認められた。性差については、適応者と不適応者の割合が男子ではほぼ半々であるのに対し、女子では7割以上が適応していると答えていることから、明らかに女子の方が大学での学習面での適応力が高いといえる。その理由として、高校や大学での学習技術や学習特性が多分に関与していると推測されるが、この点に関しては今後さらに詳細に分析していきたい。また、両親の大学・短大への進学状況においても第1世代(両親ともに大学・短大を卒業しておらず、その子どもが初めて大学に進学するケース)では、学習不適応者がやや多い傾向が認められた。ただし、第1世代のどのような要因が学習不適応に影響するのか否かに関して、もう少し焦点を定めて追跡調査をする必要があるため、これ以上言及することは差し控えたい。

なお、他の諸変数(居住形態, 出身高校の4年制大学への進学状況, 入学した大学の志望順位)については、顕著な差が認められなかったため、学習適応とは関連性がないと考えられる。

続いて、両者に対する入学後の諸変数(10月時点での学習技術・学習特性, 初めて成績を受け取った際の感想, 大学生活におけるウエイトのかけ方, 学部・学科への適応, さまざまなことへの自信)および入学までの諸変数(4月時点での学習技術・学習特性, 高校生活について)の影響について概観する。まず、学習技術・学習特性に関して総合的に考察していくことにする。学習適応者は不適応者に比べ、4月と10月の両時点で「暗記」因子(学習技術)を除くすべてにおいて、学習技術・学習特性のスコアの高いことが示された。このことから、大学新入生が入学して半年後に学習面で適応できるか否かは、大学入学後の学習技術や学習特性が関わっているというよりもむしろ、高校までの学習技術や学習特性と密接に関係していると結論づけられる。全入時代を迎えつつある現在、高校での学力もさることながら、高校までの学習技術, 学習特性, さらに学習習慣といったものが入試段階で重要なフィルターとして考慮されるべきではないだろうか。

では、学習技術や学習特性は入学して半年間で向上しないのであろうか。この点に関しては、適応者と不適応者に分けた上で4月と10月の差を検討してきた。その結果、両者ともに「文脈把握」, 「リサーチ」, 「資料整理」の3因子で差がみられ、これらはともにそれなりに半年間で向上していることがわかる。さらに、不適応者のみ「テストテクニック」にも差がみられ、学習面でうまくいっていないと思っている学生でもそれなりに半年間で「テストテクニック」が向上していることが伺える。ただし、この技術については、適応者は4月時点から高いことを付記しておく。また、学習特性に関しても両者ともに「知的関心」と「計画性」の2因子で差がみられ、これらもそれなりに半年間で向上していることが伺える。さらに、適応者のみ「受講マナー」にも差がみられるものの、4月より10月時点で下がっていることから「受講マナー」のみ悪くなっていることがわかる。このことは、学習適応している新入生が半年間で大学の授業にもある程度慣れ、受講態度に緩みが出てきている結果であると思われる。

その他の諸変数(初めて成績を受け取った際の感想, 大学生活におけるウエイトのかけ方, 学部・学科への適応, さまざまなことへの自信, 高校生活について)においても、適応者と不適応者でほとんど差がみられた。とりわけ、さまざまなことへの自信に関しては、学習面での自信のみならず、対人関係面での自信についても適応者の方が高いという特徴が見出された。また、学習面での適応と学部・学科への適応に関しては、相互関連性が強いと考えられる。

以上より、大学に入学して半年後、学習面で適応している学生はそうでない学生に比べ、成績が良く、学部・学科に適応しており、大学生活における授業へのウエイトのかけ方も高いことが示された。また、大学での学習面のみならず対人関係面においても自信をもっており、この傾向は高校時代から受け継がれていることが明らかにされた。さらに、高校までの学習技術や学習特性が、入学して半年後の学習適応に多大な影響を及ぼしていると結論づけられたものの、ある特定の因子については入学後の半年間で向上していることも明らかにされた。したがって、学習技術や学習特性は入学時のフィルターとして効力を発揮するとともに、初年次教育における重要な領域であることも裏づけられたといえる。ただし、さまざまな変数が学習適応にどのように関与しているかはさらに詳細な分析が必要



## 大学新入生の適応に関する研究（I）

であり、今後の課題としたい。

### あとがき

本稿は文部科学省平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）（課題番号：13410088）  
研究課題名：ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究 研究代表者：濱名  
篤）の成果の一部である。

### 引用文献

広沢俊宗：「学習技術，および学習特性の構造」『高等教育研究叢書』第4号 2003 25-48頁．

Abstract

To the first year students, two sides, personal relationship and learning, are important when they adapt themselves to the university. Here, focusing on the learning side is the examination of the adaptation process of the first year students. It is aimed at telling the difference about the students who think that they have adapted to the university and who do not think so in a half year after entering the university(in October when they award the first term grade).

As a result, it shows that the students who have adapted to the university learning have the better grade and it seems to them that everything is running better, about the department, subject and life of the university. Especially they pay more attention to the lesson. Besides the learning side, they also have the confidence in their personal relationship. The fact above has been known in high school days, furthermore, it has been known, too, that their study skills and characteristic in high school has a great influence on the adaptation of university learning in a half year of their entrance.

But there is a specific factor that can improve themselves after their entrance to the university, it is that we can think the study skill and the characteristic as a filter, and this filter is also an important factor in the first year education. As a future research, an examination will be done in details about the number's change of adaptation or not to learning.